

椀  
久  
末  
松  
山

謝  
公  
本  
詩  
用

椀久末松山

作者 紀海音

上

椀 久 末 松 山

明揚屋通の身は。麻。あげつのはしつ水管の涙。又来ぬ客もまだこぬ桐屋紫檀のナホスフシ音色を弾き。もたれかより  
し合たをやかさ。華清をうつつ奢とかや。地色今日の茶の湯のお客は誰そ椀久様一中様。浮世をねぶり又右衛門。各  
袴かちぐりの堅い顔して。フシ並びる。地下座にさゝれて三つ輪くむ。老婆はすみかも井筒屋の。水のよしあし知  
顔にくろめかねたる腰の鑑。上びじまんに居ながれし亭主は色のふかみどり君が根曳を松山の。雪の口切壺折の姿は  
すねて氣もすねて。洒落に洒落たるしやれ手前。オクリせかずいそがずしほらしや。地先づ掛物は情しる虎少將が眞實  
を。スエテ染め残したる二幅對。表具は庵に木瓜の。素袍の昔思はるる。フシ名は白拍子。祇王祇女。佛を願ふ朝夕の  
むすびし關伽の水さしや。心の杉の木地ぶたの。フシ氣の通りたる物好。オクリいや色好へ疊ざはりも靜御前のその  
昔。もらさぬ水の堀川や。小オクリ御所のへ宿直の棚さがしあられ煎りたる灰焙烙。班女がふかき思はくの。思ふにか  
ひも。フシなき世なら。身をも投ぐべき井戸茶碗。山鳥の尾の羽箒の。うはきな客と。フシいひかはす。中は茶入の。  
飛鳥川。千壽の前が爪音に峰の。松風。たぎらす。釜は蘆屋に啼く田鶴の。友に久しき龜菊が。フシ葛葉の里の自  
在竹。熊野が在所の池田炭。こがれてくゆる薫物入は。越中が伊勢白粉箱。茶杓はおこと道心が。ハツミ昔を泣きし  
フシまだら竹。中にゆかしや蓋置は。是なん消えし夕霧が。唇染めし紅緒口と。フシ皆目を付けて感じける。地夜會

に花は生けねども、亭主の顔は初梅に。柳あしらふ腰すゑて袂紗茶巾の取捌き湯音。水音汲みわくるハツミフシ柄杓持つ手のしほらしき。フシ利休が流宗且が。妾腹なる孫姫が此世稀なる遊色と開いたる。口を閉ぢかねし。地色盗みといへばにくけれど戀とて忍ぶ縁の下。白き腕を差出して客の脇差奪はんと。もがけども手が届かねば股引はいたる男ずねぬつと差出し親指に下緒引つかけ取る所を。椀久見付けナウ何れも。太夫が茶の湯に鬼神も感ぜしめ。心なき脇差が宙を飛ぶはと言ひければ松山かしこを差覗きキア道柴殿是は誰ちやと頬かぶりをとれば。鴛籠の作兵衛さて興がるどうぞいの様子を言へと責めかくる道柴とかう答へせず。ナウ作兵衛殿双物が無けりや死なれぬか。舌ても喰ひ切らんと。スエテもだえ身ぶるひ泣きみたり。詞椀久せかぬ顔して。様子はきかねどそちちが命は七福神の前。巾着を開いたら助けられさうな事。地色毘沙門にも愛染にも拙者が成つて。顔をかなへてやらう長う聞くのも初心な事。高はどうしてかうしてとつまんでたつた一口に。話せといふも大様に。フシ脇目をしてぞみたりける。地色道柴袖にすがりつきさて有難き御一言。死なうと覺悟極めたも五十兩の借金ゆゑ。身を長崎へ賣られ行き添ひたい人に別るゝゆゑ。その仕覺さへなるならば見えぬ冥途をあてにして。何の心中したからう生けうとも殺さうとも。お前のお心一つにと涙の内に笑顔する。男も共に涙ぐみ扱面目なき次第なり。私めも腹からの駕籠舁にてもござりませぬ。短氣おこして親の内を出て此二三年肩に物を置きます。地色戀の歌は習はうとも貧の盜はせまいと思ひしに。死損なうて淺ましき名を流さんかと。スエテ差俯向いて泣きみたり。椀久うなづき扱々心易いこと。一夜に捨捨る豆板の露より輕き二人が命。きづかひすな請取つたそれ又右衛門。詞最前の小判をといへば又右衛門不機嫌にて。お志は御尤なれど。此金は節分の御吉例借銭乞を打出す豆板。地色上はばゞ様御より。下はまゝ炊花草六尺。我等が宿の鼻そげまで今宵をあてに。貫袖半疋買ひかゝつて着せました。詞其心あて違うては兩人は悦ばうが。迷惑は大變の者地角を直して牛殺す。何とも暗き御政道と。フシにがり切つてぞ申しける。地色大盡につこと打笑ひ尤もゞ。詞汝が心も背くまいと小者

を呼びてやい汝は。走り歸つて手代の六兵衛に言はうは。のがれぬ事に金五十兩入用あり。只今持參せよと云ひければ。地色其時皆々手を合せ一切衆生平等の。如來の御慈悲有難し。消柴様勝手にて。肩取つて御内儀姿作兵衛殿は股引に。肩衣着し婿君の鬢付一兩御祝儀に。又右衛門がはづむぞよ今宵はどうやら物騒な。肌的一步のひえぬ内。はや豆打とそやし立て奥の座敷へ。三重へ入りにけり。地金にかつえぬ禿花車物縫中居下男。座頭の久都二人連お出入の尼道心。町代夜番の子持喚。足をつま立て走り出て。オクリ時刻へ遅しと待居たる。地色碗久其夜の装束には肌には好む白天驚皴。巾着は黄垢無上着には太夫が仕着せの黒羽二重。淺黄の袴股立取り靜に歩み出でければ。お傍去らずの一中は箆櫃の絛掛に。一步豆板山をなしさも。フシうや／＼しく伺候する。詞其時大盃高聲にそも節分の祝儀といつば。昔日江口神崎や情揚屋の小座敷に。化物有りと云ひふらし七つ過ぐれば女郎の。往來も絶えてあらざれば一門一家是を敷き。戀の女神に五釜の湯を參らすれば有難や。神子に託宣ましまして。汝が家の妖怪は。狐狸の業にもなく。逆柱有る家にもなし。多くの者がそこに來て家を亡ぼす魂の。地色假に止る化生の業沈み果たる一念の。ほしい惜しいの豆板を年越の夜に蒔くべしと。示現に任せ行へば。妄執忽ち去りしとなり。それより年月隔たりて傳へて知る人無かりしを。我好色の冥加に叶ひ江口の君の夢想を請け。古きを追うて新しき。今宵の祝儀面々が手柄次第に捨へやと。惠方に向いて鬼や外福内へ撒き出せば。地突退け押退け振合ひて。フシいさかひすべき氣色なり。地色かゝる所へ編笠深く身持姿。最前の小者を連れ座敷へずつと通りければ。詞碗久見るよりこりや慮外者。主人の前で立ちたばかり殊に笠はと引取れば。地色親久右衛門はつとばかりに飛びすざり。搦手をすれば面々も。周章狼狽き尻込し。フシ座敷の興はさめにけり。詞久右衛門詞を鎮め。ヤイ久兵衛何か金子入用のよし手代六兵衛は留守なれど。急なる事と聞きしゆゑ幸ひ昨日の爲替の金。汝が手より請取つた財布の封も其儘に。地色只今渡す請取れと機嫌は悪しく見えねども。胸に應ふる誤りの。詞も出でず俯向けば包み切れたる腹立の聲あらくなくわめき出しやれ痴呆者大盜



五年つゞまらう。悪しかれとは思はねど不孝の積もる天罰の。成り行く末が不便なと スエテ怒りつ泣い一口説くにぞ。地傍に居合す者どもも思はず。フシ涙を流しける。地色梶久兎角の詞なく脇差すばと抜き放し。自害せんとする所を松山縋りとゞむれば。久右衛門立上り。詞ム、親の意見をむやくしう思うて死なうとな。やれ。とても腐つた根性からは生きて居ても花實は咲くまい。併しおのれ獨り殺しては。冥土の母へ言譯がない。地色逆ながら某も歎腹切つて追付かん。死ねや急げと責めかくる。フシ聲も涙に震ひけり。地色松山泣くく云ふやうは。詞ア、勿體なき御仰かな。地色世に有難きお志何しに悪しう聞し召さん。篤と御合點いたさうな如何な事明日よりは。廊通もなされまい我身も今のお詞にて。ふつ／＼思切りました。此廊を出ぬ法もあれ今から文も通はさじ。是に免じて此度の御腹立。御許し下されよと スエテ涙ながらに掻き口説けば。梶久顔振上げなに懇切るとは擲るるも叱らるゝもおのれ故と。地色云はんとするを口に手を當てナウこれ。詞杖の下からも廻る子が可愛と言ひます。お慈悲な親御が憎うておつしやらうか。いとしいこな様にお爲にならぬ事を申さうか。これ常は是程の事はつい合點の行くが。いかうせかしやんしたさうなお道理ぢや。大切な人の命二つを救はしやんした。五十兩の金違うたと云うては義理が立たぬ故。死なうとの事であらうナウ。わしも太夫ぢや。こな様に引もつけますまい。二人の者も死なしますまい。地色お前が双物三昧なさるれば。面打の様にて親御様が。一倍お腹を立てさんすと スエテ縋り付いてぞ泣きみたる。詞久右衛門聞いてホ、神妙な心底。年寄めが心を感じ今の一言たがへ給ふな。家藏も埃まであれが物。地金故義理は缺かせまいと懐中したる金子にて。忤が命は拙者が買ふ。汝は二人が命を買へと。包ながら投出せば。どこやら料な親御様と フシ皆々顔色直しける。時に久右衛門合口抜いて梶久が鬚根より切落す。是はと云ふをア、騒ぐまい／＼。

詞世間の聞え舅への義理。勘當せねば立たぬ首尾俗の姿で追ひやらば。地色中々浮氣は直るまい。さあらばあられぬ方便事。又は様々悪心募りて悪名を双に残し。屍を野邊に晒されんを久離の子とて餘所に見て居られうか。詞姿を變

ゆる此上の慈悲首を纏ぐることぶき。地色衣に染めて里々を托鉢して世を送れ。それとも飢に及ぶなら指圖はせぬが従弟も有る。家來の門へ立つとも咎むる程の事あらじ。是もいふまじ。他人ぢやもの。憂しや浮世と横へ振る顔は、フシ涙の置所。地色金言耳に應へてや得心顔に槐久は。親に向つて一禮し何處ともなく出て行けば。松山やがて追付いて妻も許さぬ出家とは。はてやくだいもない何處へと控へる袖を振放し。調子最前わが方より懇切つた。

地色ナウ切らうと云うたは切りともなさ。親御様のお心を宥めんばかりに胸怒な。お心とも知らいて假にも云うたが悔しい。氣遣さんすな傾城を居腐りにして成りとも。園へまし上我身を捨てゝ行かうとは。曲もないやらぬくゝと縋り付く。地色一中見兼ね中に入り御勘當は當座の事。とやかうあれば却つて槐久様のお爲にならず。萬は我等吞込んでみす追付け目出度う逢せましよさもあれ餘りお姿の。見すばらしうてお笑止や。地色垢馴れたれど一中が。心計の餓別と十徳脱いて着せければ。地嬉しや是も後世の縁。廓は西方極樂の二十五歳の夢の内。醒むれば何の變哲も無き世の中こそ。三重へ哀れなれ

## 中 之 卷

フシ夢路には。足も休めず通へども。現にかへす佛やステテ姿の關の座敷牢。我物盗む金銀の小オクリ科そとへ思ひ諦めし。フシ候べく候に馴れた目の。地色近付ならぬ文字よみもはしり智恵とて小器用に。古文も半空にやる名のゆかりとて西の銘。調乾を父とし坤を母とす。何ちや乾坤を。父母と云うたは此唐人めも。勘當に逢うたさうな。不夜城の仕過か妓女文作が募つてか。地色咄の合はう男ぢやと。得手に引込む註釋は壁の耳さへ。フシ恥かしき。地色舅の義右衛門次の間に咳拂ひして詞をかけ。詞ホ、結構なお心がけ。此様子を親久右衛門が聞かれたらほろりとしられう。ナウ若い時の不届は世にある習ひ。勘當が惨いの面目がないなどて。必ず短氣な魂を持給ふな。つまらいて駈



落した者も。心が直れば富士を見たが徳になる。沙汰はない事身共も。二三年前までは。節季々々に二三十兩程の仕過し。地色塵が積りて山の神に前垂て縛られたも。さら／＼恥とは存ぜぬ聲殿をかくまふに。座敷書院打開き。伽こしらへて朝晩の御馳走申す筈なるを。小暗き一間に押込めて置く故に。娘が怨めしさうに親の顔を打守るが。目に餘りて不便なれども。詞かやうに致すが御身の藥。又は詫言の種にと存じての事。僅か十日か廿日の内不自由をこらへ給へ。地色最早今宵も初夜半時所帯持の第一は。夜は早う寝て朝起の。稽古に功を積み給へと。オクリ教へてへ奥に入りに行り。地色かゝる折節妻のおさん同じ見舞も色含む。氣に覺ある差足や世間晴れたる妹と脊の中に思はぬ川出來て寢所替る。フシ宿直臥。地色小腹が立つて夜が寝られずあくる翌日は十六日。地獄の釜の蓋さへ開き。餓鬼も嗜む男ぶり三途の川原をぞめくとかや。如何に斯うした時なりやとてお髪も結はずばらばらと。頭の延びた故にやらお色の悪い顔が。目に。ステテちらばうて氣の毒な。地色暫しの内と堅めたる下紐の關解かずとも。目に正月の御祝儀に髻など剃らせ參らせんと。剃刀茶碗持ち添へて。かしこに來り佇みていかう靜な。モウ御寝なつたかと。フシ内の。様子を見ひみる。地色斯くとも知らず椀久は大欠伸三つ四つして。詞世の中の親父といふ親父に。霞のかゝらぬ親父は一人もない。錢金持つても太夫に逢はずば何の樂がある。淋しいとて宵から寢てはあつたら目が愚痴になる。新町橋はどこちらの方ぞ麻は爰から見えぬ事か。地色エ、今時分三枚肩て押す奴もある。一中が咄も油がのる最中。備前の野暮めがとつくりとしおとし顔に弄りをろ。張をもつ太夫なれば一倍厭な身振して。格子へ出て犬そばやしてゐるを見るやうな。其處へちよつと拙者が顔出したら忽ち笑顔をお目にかけるに。詞損料貸しの天狗の羽はないか。揚州の鶴は下りぬか十萬貫を腰に付け。地色太夫を引掛け立歸り千年を結ぶ松山に。逢ひたい見たい戀しいと。願の糸の二上りや八百萬代の神かけて。どうか斯うかと。行末を。思うて胸を焼かうより。いつそ此身を。捨草の露と。消えなば。恨もあらじ。只兎に角世の中は。かの一色の儘ならば罪な作らじ。諸共に。邪淫の悪鬼は身を責めてその念力の道も懸路も

高擗の上に戀しき人は見えたり嬉しやな。地色ナレ松山が早う爰へと招かれて。急かるゝからに足震ひ。飛ぶよと見えしが縁先の石の角に胸打ちて。うんとばかりに息絶ゆる椀久はつと走り寄り。呼び生けんにも勝手は近し水も薬もあらばこそ。途方涙にうろ／＼と。スエテ手足を抱へ居たりけり。おさん此有様を見るよりも恨み妬みも餘所になり。涙催す仁愛の襖を少しおし開けて。茶碗の水を差出せば。椀久嬉しく押戴き心と目とに禮言はせ。大夫が耳に聒きてナウ是女房が。菩薩心にて大悲の水を興へしぞ魂返して一言の禮言うてから死なば死ねと口より口に入る息のやう／＼心付きけるにぞ。抱へて座敷に上りつゝ互に目と目を見合せて。スエテ抱き付いてぞ。泣き居たり。地色おさんも襖の此方にて袖を絞りてあたりしが。包むに餘る言の葉の扱も見事な心中やな。地戀に命も捨つるとは咄には聞いたれど。目に見たは是が始め我夫のみか世界の人親の諷世の謗も梅はず行くは浮れ女の。此誠より迷うての事情の道も無路をも。今宵の今覺えたり。我はもとより。フシたらちねの。地色懐出てぬ生娘にて淨瑠璃や歌舞伎をば。此道の學問にて女心は一筋に男はどれも悪性なと思ひ諦め居たれども。詞仲居や下女が陰言に裏様はうつそりぢや。人形ぢや佛ぢやと急かす下から悋氣して。地色更けて歸らせ給ふ夜は物のたまふも不返事に。枕蹴散し頭から後向いたる寢姿の。厭らしからう憎からう。お腹が立つたであらう物と思へば今更恥かしや。詞今年は斯うした事の出来ようとてか初春祝ふ染小袖に。腰元が油をかけ秘藏の三毛は鼠にかまれ。地色何かに付けて氣掛り故天神様の裏門にて八卦見て貰うたりや。詞申酉の方の女が呪ふといふ。それには私もせき上げて。地色憎やおのれに負けうかと。貴い坊様聞出して道切の札離別の御符。精進したり垢離かくを箬様へ聞えて。男の内に居ぬは女房の馳走の足らぬ故。左様な。邪な心持つ故。久兵衛殿に憎まるゝと殊の外叱られても。エ、無理な事ばかり日本國に我程な。地色男思は有るまいと思ひし事の愚さよ。遠き廓の關を出て幾重の門塀乗越して通ふ人さへ有るものと同じ内に住みながら。親同胞に遠慮して襖一重を越えかねて。心一つに歎きし事。愚痴とや云はん不届とやせん疎まれたるは我身の科。思へば器量も心中も。劣つた物

負けた物。さうとは知らなくてくしくくと。昨日迄も今日迄も傾城とやらに騙されて斯様な愛目見給ふといとしようも亦憎うも亦。思ひし事の勿體なや恥かしやと。フシしゃくり。上げてぞ泣きにける。地色松山も共に打伏しゐたりしが。ナウおいとらしいお心や町女藪の一筋に。詞男をいとしがらしやんすに。名も浮れ女の心中が何しに及ぼうぞいの。嗚や今迄私が名を聞かしやんすも憎かつたで有らう。お腹の立つたはお道理でござんす勤の身でさへかはゆい男には。倍氣するといふ様な物ではござんせぬ。地色如何程惚れた人にも女房の有ると聞いては。どこやらがをかしからぬを腕久様とは異な縁で。詞お前といふが有るを知りながら只滅多にいとしようて。假令大名の奥様と呼ぼるとも如何な事行くまい。よしや一生妾と云はれうと腕久様には離れまい。地色是程には思へども假にもお前を去らしやれとは。神かけて。フシ云ひはせぬ。地色取交したる起請にも變らじとは誓ひたれど。夫婦になるとは得書かぬも皆こな様へ立てゝの事。ゆめくお二人の中裂かうとは思はざりしを。詞恥かしや今参りしはいかい悪心ナウ腕久様も聞給へ。丙々の井筒屋の客が請出すに極り。金も渡して明日は國元へ連れ行く筈。姉女郎や傍輩衆目出度いのあやかるのと。地色肩や背中をつくくと心一つに思案して。譬へ泣いても笑うても今宵明けては歸らぬ事。こなたを誘ひ立退きて何處如何なる山の奥。菴の宿に忍びても女夫事して遊ばんと。路銀も才覺して來たと袖より袱紗投出し。斯う迄はしたれども其淺からぬ御仲の。目を盗人の振舞して通ひ参りし附當。不慮なる怪我に自は冥途へ半参りしを。その情の一粟に二度いとしい顔を見て思も戀も晴れました世の中の仇を恩にて報ずれど。恩を仇では。フシ報はぬとや。地色思切るは切つたれども。田舎へも下るまい廊へも歸るまじ。兎角は心一つにと。フシむせ返り。てぞ泣きにける。地色おさんもあつと聲立てゝ嬉しき人の心やな。詞それに就き我身の上の悲しき事明し申さん聞き給へ。常々母様の仰には厭がる男には添せまい。暇取つて戻れとせぶられしを。地色とやかう延べてある内に。斯うした首尾に成つてはいよゝゝの事。されども父様が頼もしうて。他人でさへおちめには見はなされぬ。まして露ばかり

も如才ごとくさいしては。世間が立たぬと云うてかくまへ置き給へど。詞母かきも様がわゝしうて子にかへての義理立は。をかしの厭らしいのとねずられて。此二三日はどうやら父様ととさまも思案顔なる體ていを見て。地色我身の悲しさ主様ぬしさまに咄つして。爰こゝを立退きて添そはうか。イヤ何もしつけぬ我なれば長らへ憂目見んよりは。いつそ諸共死なうかと。襟々思ひわけれ共なま中咄つしたとてそなたと云ふ深い仲あれば。地よも自らとは死なうとも退かうとも御合點は參るまいと。思へば恥しうて包みしが。詞今咄つしますは倍氣ばいけいでも何でもない。地色そこにも主ぬしに別れてはよも生きては居られまじ。其命を私わがに呉れて。連れ立ち退きて添そひ給へ。二人ふたりの内うちに一人はとて死ぬる命。同じくは相思せふしふ中は残り給へ。我身は兎にも角にもならん。さは云へ夫婦は二世といふなれば。此世は松山殿と添そひ給ふとも。未來は必ず自みづかと妹脊いもせの契ちぎ變り給ふな。言ひ置く事は是迄と持ちたる剃刀逆手に直し。自害せんとする所を椀久あわて止め兼ね。襖の下に押伏すれば死なんともがく女心。されども強き男力おとこぢから。恨めしげなる聲を出し諸共にとも云はゞこそ。身をば恨みて死ぬるものをそれさへ儘にし給はぬ斯くまで憎き我身かと恨み罵り泣給へば。是非に迫りて椀久は。フシ只せき上げて居たりけり。地色松山立寄りそゝけし髪を搔撫かきかてて。我身を立てゝ死なうとは有難ありがたや忝かたじけや。添そへと許しを請けたれば最早千年萬年も。契ちぎつた心地の致いたしまし微塵みじんも残る事はなし。則ち只今返します親御の心さがなくば。何處いづてなりと添そはしやんせ夫婦と知れた仲なれば。詞浮氣うきとも徒いとづとも指差す人はござんすまい。我身は金に任す身の死なねば濟まぬ心なれど。お志のせつなさに義理に憂身を沈めつゝ。請出されて行きませうナウ椀久様。今歸りなば翌日あすよりは田舎女房と思召せ。お心ばし残されな自ら廊ろうかに無なきならば。地色定めてお身も納まらん勘當も御許され。御夫婦目出度う榮え給へ。起請おこしこそ今は仇なれはなくば忘るゝ際きざも有りなると。引き破り噛みしだき思切つたる顔ばせの。詞は清く日は濁る睫にじまに玉を持たせつゝ。ずつと立つて出でければ椀久急いそいで聲を上げ。實正田舎へ下くだると走りよつて引据ゆれば。おさんはやがて起上り死なんとするに又立歸り。持ちたる剃刀かみばしもぎ取らんと涙なみだ合ふ隙ひまに松山は。梢こずえに帯を引き掛けて癖くせの

上にひらりと登り。椀久様おさん様不心中はお爲ぞや。世間の誹そとはよき様に。頼みまするといふ聲も オクリ泣くくへ飛び降り出て行けば。地色雨無三寶さんぼうしなしたり。その根性と知るならば最前に殺さうもの。よしなき水が仇となり備前びぜんの客めにうまくと。添はせん事の口惜しやと足ずりして居たりしが。エ、腐つた心底と知らないで其方またを。此年月袖に思つた面目ない。せめて彼奴やつめに恥をかませて腹癒いんと。馳出る袖を引留め。女郎に科はない皆私故わしの事なれば。共に言譯致さんに連立ち行かんと泣出だす。椀久聞いてイヤ其方そのほうを連行きては親達へ言譯立たず。暫しが内遠うちとほさかるとも女夫の仲は變るまい。さらばと云ひて最前の松の梢すずなに馳けのぼる。おさんは猶も跡を慕ひ。嬉しい詞聞くからは親には生きて別るゝとも。同じ道にと這ひかゝる松の梢すずなに鶯うすかづら。よれつ纏れつ離れねば。不便ながらも剃刀にて形見に残す下紐したじゆの。中よりふつと切り放せばかつばと落ちて泣叫ぶ。出て行くつらさ止る憂うれさ。互に心くみ帶のきれん。になる。三重へ世ぞつらき。

## 下 之 卷 椀久道行

二より眼辿り行く。今は心の。浮かれて。末の松山。思の種よ。合手死なうかの。どうもせ。これくく君ゆゑに。あのや椀久はこれさ。鼓の皮よのほんえ。しんぞ此身はこれさ。く。うち込んだ。しんぞのほんえ。とかく懸路けんろの ナホスフシ亂髪らんぱつ。起きて別れし。倂おとの。小オクリ問へど答へずしよんぼりと。去りし寢覺に締め合ひし肌と肌との其うつり。フシ昨日は今日の。昔にて。そも我ながら淺ましや。詠法師々々は木のはしと。思ふは野暮やぼよわけしらず。心の花の薫かほをば。知らせたいぞやア、はちく。詞此十徳も其縁ゆかり一中がくれをつた。フシ智恵も器量くらひも身代みだても。皆淡雪消え失せて。交せし事の替るとも。變らぬやうにと先の世を。先で逢ふやら逢はぬやら。どうやら斯うやら知らねども。せめて未來は違ちがひなく。我と一所いしょに極樂へ。それも叶はぬ物ならば。たとへ奈落ならくの。底までも二人手ふたりに手



りてこれや寢耳へ百錢が這入るは旦那のお蔭。仇に思ふな皆の衆が一日汗水になつても。かたはなに八十四文はか儲けぬに。地色福徳の三年目乞食仲間の仕合者。起きよ。くくと揺られて。詞椀久ずつと立上り。何ちや此錢を主人が呉るゝとや。ヤイ善根と云ふはな。未來の福田を蒔くとて往來の人が。地色慈悲の袖より漏るゝ一錢二錢を請け喜んで替僧が。朝夕の煙を立つる助とはする。肌を隠す布子は着る。後世を願ふ十徳あり乏しきにはなきものを。覺えなきに合力とはたはいなき借上人。花にくるゝか露にはづむか。冠古けれど春に穿かず。大盡は腐つても。フシ太鼓は持たぬと突戻す。地色早次郎打笑ひ扱々心ある氣狂や。そも左様な堅い事は誰が教へけるぞ。ナウ氣狂の眞似とて狂へば直ぐに氣狂。四方に四萬の藏有れども限有る金銀を。色の奴と遣ひ捨てし天の罰親の罰。金の罰が當つて目前の法師が有様。見ても聞いても嗜み給へ歸らぬは昔。止らぬは浮身の末淺ましや悲しやと。フシ涙を流して語るにぞ。是は尤もくくと皆々袖を絞りけり。地顔は隠して松山は雪をかつける綿帽子。涙の玉の小間金を袂紗ながらに差出し。詞ナウ坊様是はな新町橋で拾うたが。戻さうにも主が知れば此所に捨て、行く。地色同じくは坊様拾うてなりとも下さんしよば。嬉しからうと言ふ聲も。スエテむなつばらしう聞えけり。地法師受取り押戴き。お姿は見ぬが御器量さうな。物腰が素人ではない。お肌再添うた袂紗めにあやかつて。合懐かしい人の懐に寝たい。詞殊に新町橋で拾うたとあれば辻占がよい。太夫を仕落した客めが頓病死して。二度身どもが手に入る吉相。地色目出度い目出度い祝儀の爲の一踊。咽水を汲みやらばようやよや小川で汲みやれ小川小石川轉び合うて轉びくくく轉びかゝるとよえようやよやよら。小川で汲みやれ。小川小石川轉び。合うて轉び。轉びくくくかゝるとよえ。棲はひくとも外へ靡かじ。地色あれ聞給へ外へ靡かぬ心底を。かはゆう無うて何とせうと。スエテ踊りつ泣いつ狂ひける。地色然る所へ作兵衛道楽驅け來りさてく曲もないお仕方。女夫の者が今まで此世に長らへるは。お情故とは誰知らぬ人もござりませぬ。そのお前に袖乞させまして。我々が家の内に居られうものか。假令水を湯にわかし我は飢ゑてもこな様を。

かくまへまして行く／＼は何ぼ父御の當分は。石て手詰めた折檻なるとも。月日の立つに従うて。親は泣き寄り片端なる子の可愛いと申せば。御歸宅は追付の事暫の内も人が見る。お草臥なら作兵衛が。負うてなりと抱いてなりとも歸りませうと。恨みつ。泣いつ掻き口説く。地色思ひ餘りて松山は。駕籠の窓より顔差出し何誰かは存せねど。頼もしきお心や見れば物狂しき御有様。夜晝付いてなりとも外へ出して下さんすな。頼みますると云ふ聲も。フシ心迄くる涙なり。地色道柴そこへは目も遣らずこれ作兵衛殿。詞我身も同じ流の身。犬猫の様な傾城と同じ様に。思はしやう所が恥かしい。あつたら金をせめて川へ捨てたらば。どんぶりとも云はうに。よしない四つ足の薬喰遊ばして。地色斯くまで衰へ果て給ふと。フシ恨の角を生しける。何我事を衰へたとは今でも歴々の手代あり。ア、慮外ながら御大盡。浮世小路に駕籠はあれど。君を思へば藥草履花につらしと詠み置きし。嵐が六法よいよさ。荒い風にもようやよほいほ當てまい様を。やろか信。濃の。詞ハア冷いなげに。雪國へサアサさん此え。川ちや。ざんざら柳のよいよさ。白根が／＼よいてがよいてが。駒のひざふしんからが。膝栗栗毛にしんがらり。詞乗つたか乗つたぞ。地信濃へやろか。やろか信濃の／＼。詞ハアつめたいなげに。雪國へさあささん此え。思ひ焦れ／＼とつと山家の苔痕が。雨にそぼ濡れてついつくばうた。かいつくばうた取りなりは。曾我のす。すつきり祐成ちや。詞きんにやう／＼／＼にやとらげ猫の／＼情あれかし。地二人は袖に縫り付き。信濃越後の雪よりもつめたい心に騙されて。さて正體なき御有様。千萬人の見るよりも。一人が見るのを恥かしう思さぬか。せめていとしやと思はずとも。人が笑へば人並に笑ふは憎や卑怯や。胴慾やと睨み付けたる駕籠の内。松山今は堪へ兼ねて尤ぞや。理ぞや。お爲に斯うはしたれどもあのお身に成り給へば。今と成つて立ちらせぬこしらへ置きし言譯は。是御覽ぜと懐にたしなみし。さすがの鞆を抜き捨て。南無阿彌陀佛といふ所を。詞早次郎詞をかけ。先づ待て一言いふ事ありアノ法師を梶久とは初めから知つてゐる。傾城は賣物金が敵と云ひながら捨捨る命に比ぶれば千金も塵埃。地色さりながら半錢でも掠れば命を斷つ



## 椀久末松山終

道理。さあれば又重き物。しかし命より重きは義理の二字ぞかし。我も鄙ひなびた身ながらも太夫が色に目が見えず。切なる金は出しぬれど命庇かばはぬ心底の。中引き分けて行く事も物の哀あはれを知らぬに似たり。其上親久右衛門代々御屋敷へお出入致せば。彼是以つて餘所に見られず。よしや某も愛着あいせきの根は枯れずとも。松山には暇ひまをやる。フシ至極の涙塞せきあへず。地色早次郎重ねて。一先國元へ同道し。樞機すうきを借つて親達へ。宜敷く勘當詫わびなんに先づは目出度く出船と。椀久松山相興あうこうに打乗せてさらばくと立出づる。世界の事も好色かうしよくも。誠を道の親とかや來こし方よりも今の世々。又後世の末永く榮さかは色の道ならん。

右此本者依爲懇望文句音節等悉校合加秘蜜令開版者也

豊竹若太夫直傳

大坂上久寶寺町三丁目北側

正本屋九左衛門開板

